

六孫王神社は源経基邸を起源とするか？

高橋 昌明*

1. 人をミスリードする史跡

1200 年余の歴史を誇る京都には、有名無名、無数の神社仏閣、史跡・名勝がある。この中には史実の面では疑問符のつくもの、後世になって「復元」的に創られたものなどが少なくない。

たとえば、寺田屋事件や坂本龍馬が伏見奉行所の捕方に襲われたことで有名な伏見寺田屋は、本物は戊辰戦争で焼け、観光スポットになっている現建物は、30 年後に旧蹟地の西隣りに再建したものである¹⁾。

嵯峨野の祇王寺は、法然上人の弟子・念仏房良鎮の創建と伝えるが、中世以降荒廃していた。これを明治 28 年 (1895) になって、嵯峨の有志が『平家物語』の遺跡として復興し、往生院祇王寺と名付けた²⁾。清盛の暴君ぶりを印象づける祇王の説話は、『平家物語』の本筋とは直接関係せず、そもそも話自体が史実とは考えにくい。当時複数の念仏修行者が一つ庵で行い澄ますという説話類型があって、独立の女人往生説話であったものが、『平家物語』に取り入れられた結果だろうと考えられている³⁾。大原寂光院も、建礼門院の終焉の地ではないらしい⁴⁾。

これらフェイクな建築物とは違うが、錯覚

や誤認も黙許するかのごとき施設もある。現京都御苑と京都御所もその一つである。現在の京都御所は里内裏の一つであった方 1 町の東洞院土御門殿を前身とし、近世に入ってから位置は動かないが規模は数回変わり、次第に大きくなって現在の大きさになった⁵⁾。御苑の地はその御所を囲む公家邸の密集した範疇であった。近代の東京遷都によって公家町は解体し荒廃したが、岩倉具視によって整備され、明治 28 年にはほぼ今日見るような景観になった。むろん本来の平安京内裏・大内裏とは場所も外観も規模も全く違うのだが、観光客はこれをなんとなく平安の内裏と思いきんでしまうだろう。

平安神宮の社殿は、平安宮朝堂院 (八省院) の再現 (原寸の 8 分の 5 の規模) として、明治 28 年の建都千百年記念祭 (第 4 回内国勲業博覧会) 開催に合わせて造られた。ところが、正面の主殿たる大極殿の外観は、延久 4 年 (1072) に建てられた第 3 次大極殿のそれで、創建当時 (第 1 次) は全く異なった形の建物であった可能性がある。高橋康夫・藤井康宏両氏の復元図では、2 階建てになっている。さらに平安神宮の瓦はすべて緑釉瓦で葺かれているが、創建当時の大極殿を緑釉瓦で復元することは、考古データからは疑問が残

* 神戸大学名誉教授 (人文学研究科)

キーワード : フェイクな史跡、六孫王神社、源経基、平家の西八条殿跡、室町幕府の庇護

Key words : Fake Historic Replica, Rokusonou Shrine, Minamoto Tsunemoto, The Remains of Residence in Nishihachijō of Heike, Protection of the Muromachi Shogunate

るといふ⁶⁾。

フェイクや錯覚誘引とはいえませんが、現況が過去と相当違っていると考えられるものがある。金閣寺・銀閣寺は京都観光のハイライトだが、今日見るところの金閣（鹿苑寺舍利殿）は、1950年焼失後の復元的考察による再建であり、絶対的なものではない。宮上茂隆氏によれば、創建当初の形はかなり違っている。現在2階・3階は床以外はすべて金箔押しであるが、当初3階の床・高欄・腰組は黒漆塗り、2階は高欄を除き内外ともすべて黒漆塗りであった。現在の3階の中心は1・2階全体の中心と一致し、屋根は越屋根・柿葺であるが、当初3階の中心は1・2階の西側主室の中心と一致しており、二階屋根の東部は入母屋屋根・檜皮葺で、外観は西本願寺飛雲閣（聚楽第遺構であることは確実）とよく似ていたなどとする⁷⁾。

銀閣寺（慈照寺）も考古学的な発掘の結果からすれば、現景観は近世以降のものといわざるをえない。16世紀中葉、近在の瓜生山城などをめぐる戦国の攻防によって、東求堂・観音堂（銀閣）を残し多くの建物が破壊された。16世紀後半になって東求堂の場所移動をはじめ境内整備がなされ、近世初期に庭園の大規模な修築、庫裏の建築があった。幕末までには向月台や銀砂灘もそろうて、現状の庭園に近い姿となったのである⁸⁾。

こうした事例は多々あるが、意図してありえない史跡を創出した、と考えるべきものとして、六孫王神社をとりあげてみたい。いうまでもなく清和源氏の祖である源経基とその子満仲を祀るとされる神社である。こんなものが平安の中期から西八条の地に一貫して存在したのであろうか。史料をあげて、その疑問を解き明かしたい。

II. 平家西八条殿の跡地はどうなったか

六孫王神社は近世以前には、八条櫛笥にあった遍照心院の鎮守社との位置づけだった。同社は戦国期衰退したが、塔頭東林院に住した南谷上人が、元禄13年（1700）徳川家に乞うて、本殿・拝殿等の建物が建った。それ以後の景観は安永9年（1780）刊の『都名所図会』巻2の「万祥山大通寺遍照心院」の挿画から伺える。社域は寺の境内の南半分を占め、社殿のある築地で囲んだ一段高くなった区画の背後（西）にはこんもりした森と神廟が、神前（東）には神竜池、さらにその東には貞純社などがあり、境内の東北には弁天社、挿画には見えていないが八条通大宮の西には六孫王社の御旅所として満仲公誕生地もあったらしい。

同社は明治の神仏分離で遍照心院から独立し六孫王神社と改称。現在は東寺の西北に鎮座する。明治の末年、国鉄梅小路駅の敷地として買収され、東海道線の線路の南に移建されたからである（下京区壬生通八条上ル八条町）。遍照心院も、南区西九条比永城町（大宮通九条大路下ル東側）に移転し、大通寺の名で今日に至る。

当地が源氏の祖ゆかりの地であるという主張は、たとえば『山城名勝志』巻5が引く遍照心院「縁起」に、「当寺は、源経基王の旧蹟たり。天徳五年薨逝し給ふ。則此所に靈廟を築、六孫王権現と号、今崇め奉（る）所の鎮守也。其後鎌倉右大臣実朝公の後室三位禅尼〈法名本覚、坊門内府信清公女〉大檀越と成、廻心上人を請し、開山として、戒律三論真言兼学の道場となる。鎌倉二位禅尼〈平政子〉伊予国新居庄を寄せらる。右府將軍の菩提場となし給ふ」とあり、これらは広く信

じられた。

ところで、『大日本史料』第7編之3、603～4頁には、応永5年（1398）12月6日足利義満御判御教書、同6年4月10日管領畠山基国施行状、遍照心院敷地絵図（Aと略称）という3通の『六孫王神社文書』が掲げられている。Aは現行地形図と天地左右が逆に描かれたもの（第1図）。その範囲を条坊制的に表現すれば、左京八条1坊2・3・4・5・6・7・10・11・12・13・14・15町と九条1坊9町、計13町分に相等する。そして5町と6町の北1/3を除いた部分に「西八条遍照心院御堂敷地」の文字表記があり、さらにその5町中の西端、坊城小路（坊城通）に面した場所に経基神社 満仲神社の書きこみがある。

義満の御判御教書によれば、遍照心院はこの年7月24日の夜に炎上し、「寺家文書は紛失」したという。当然その事実の真偽が問題になる。Aは奥に「一見し了んぬ」とあり、証判は義満の武家様花押である。義満が武家様花押を使用したのは嘉慶元年（1387）まで、寺社本所以下の公家方にも武家様花押を使用したのはさらに遡って永徳元年（1381）までである⁹⁾。すなわち『大日本史料』編者がAを「応永五年当時ノモノニアラズト雖モ、参考ノ為メニ附載ス」としているのは理由なしとしない。少なくとも応永5年の年紀は疑うべきであろう。

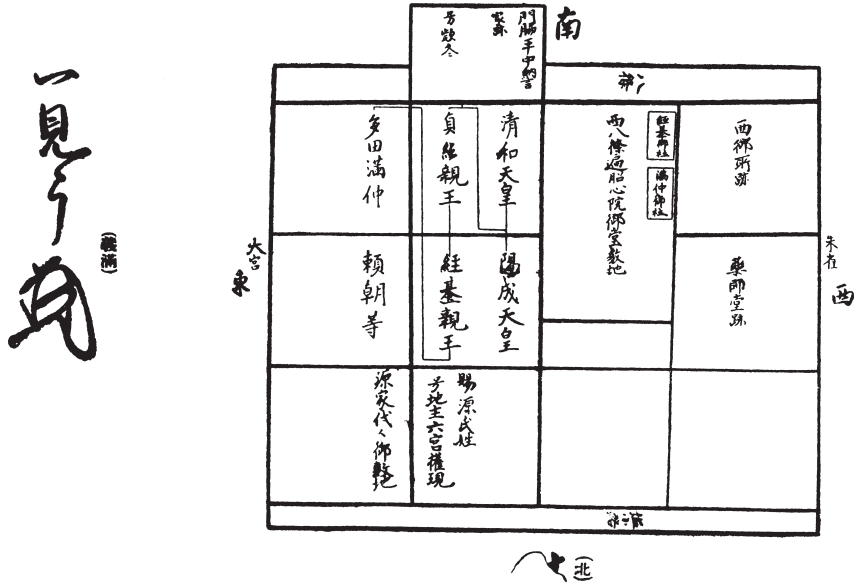
このあたりはもともと六波羅と並ぶ、平家の京都における本拠、西八条殿が所在した（第2図）。Aに描かれた条坊のうち、11・12・13・14町は、確実な同時代史料で裏づけがとれる平家の西八条殿の範囲であり、5・6町にも広がっていた可能性が強い¹⁰⁾。この地の北半分弱は現在市営の都市公園（梅小路公園）となっているが、近年公園に接する

10・15町の北部にあたる場所に、オリックス不動産が運営する京都水族館計画がもちあがり、近隣住民・学会・研究者などの反対を押し切って、2012年に開業した¹¹⁾。

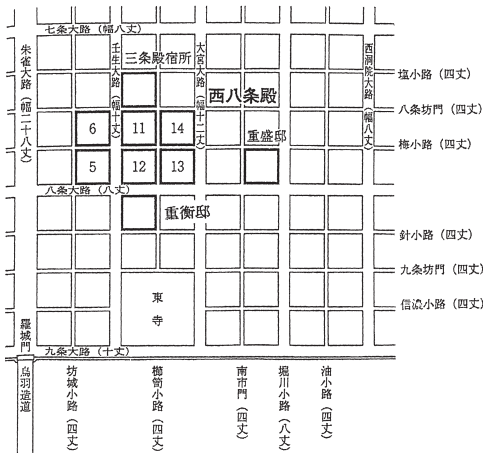
西八条は平家没落後、没官領として頼朝が給わる。だが一旦は「公用」に用いたいとの後白河院の内意が示され、その後頼朝側の知行に任されることになった（『吾妻鏡』文治3年8月27日・10月3日条）。『仁和寺日次記』によれば、建保2年（1214）12月16日に、前内大臣坊門信清が実朝の「八条家」に移徙したとある。信清の娘は実朝の正妻であるから、信清は舅として主不在の婿の家に転宅したのである。平家の六波羅が鎌倉幕府の京都での政治活動拠点として再編成されたのと同様、没官された西八条殿跡の最中に実朝の邸第が建てられたわけで、これらは新旧武家勢力交替の事実とより強力な武家の登場を、王朝勢力や都市民に印象づけるため、狙ってとられた措置であろうか。

実朝が暗殺された日の翌日、夫人が落飾した。未亡人の法名を本覚という。寛喜3年（1231）正月22日、本覚尼が西八条を訪れる。故実朝の十三年忌追善のためである。それ以前に実朝の寝殿を堂となし、この日堂供養が行われた（『民経記』寛喜3年正月条）。すなわち遍照心院である。開基は廻心上人真空で、本覚の従兄にあたるが、細川涼一氏はそのことより、彼が唐招提寺派律僧の中でも、事蹟傑出した人物であった点を重視すべきだという¹²⁾。

『東寺百合文書』中には、弘安6年（1283）3月8日の日付をもつ遍照心院指図があり、これには同院第2世長老本浄房禅恵の置文案が附属している（『鎌倉遺文』14803号）。同文書は南北朝期東寺と遍照心院が款冬田7段



第1図 遍照心院敷地絵図 (A)
 〈六孫王神社文書〉



第2図 平家の西八条殿周辺

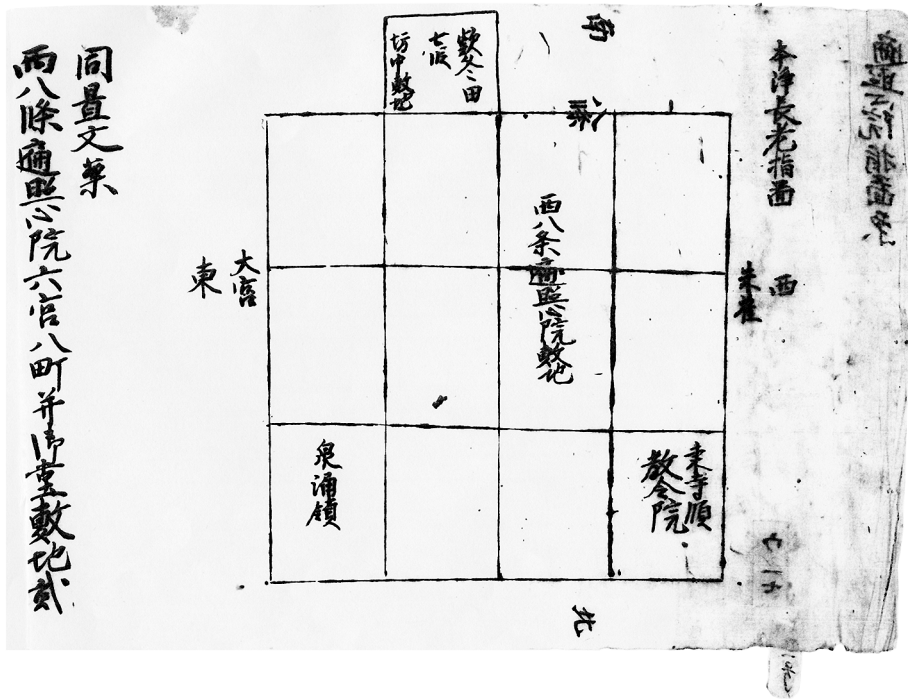
をめぐるって訴訟を展開した際、遍照心院が自らの主張を裏づけるため用いた資料で、それが相論相手の東寺側に残されたのである¹³⁾。

この指図 (B) と略称、第3図) に描かれている範囲はAと同じ13町分で、八条1坊5・6町にあたる所には、やはり「西八条遍照心院敷地」と書かれ、そのほか九条1坊9町に

は、「款冬田七段、坊中敷地」、2町には「東寺領教令院」、同15町に「泉湧 (寺) 領」の文字が記入されている。

Bに続く置文案には、西八条遍照心院領として「六宮八町并御堂敷地貳町・薬師堂跡壹町・西御所跡壹町、次いで八条以南平家没官領〈門脇平中納言跡号款冬〉柒段事」とある。「東寺領教令院」「泉湧 (寺) 領」の扱いが難しい。普通に考えれば、遍照心院側の資料に東寺領・泉湧寺領と書いてあるので、この2所は同寺領から除かねばならないだろう。教令院は東寺の子院であり、当該地が教令院敷地であった時期があることは他の史料からも証される (『鎌倉遺文』4330号)。「泉湧 (寺) 領」も事実であろう。

ところが左京八条1坊の遍照心院領は、「六宮八町」と「御堂敷地貳町・薬師堂跡壹町・西御所跡壹町」を併せると、計12町となる。東寺領・泉湧寺領の入りこむ余地はない。この難点を解消するためには、多少強引だが



第3図 遍照心院指図 (B) と同置文案 (冒頭のみ)
 〈東寺百合文書ウ函 17号〉

2町の「東寺領教令院」、15町の「泉湧（寺領）」も係争の地で、相手側の主張の場所を図示しただけで、置文の方で合計12町だと主張しそれを退けている、という解釈が必要となる。

実際、室町期の遍照心院は、教令院のある「塩小路朱雀田地売町（八条1坊2町）」は「当寺領」だと主張し、下地を打渡されている（『早稲田大学所蔵〈荻野研究室収集〉文書上巻』466・475号など）。その後も遍照心院は、左京八条1坊全16町中の北辺の4町分を除いた12町、「東は大宮面、西は朱雀、南は八条、北は塩小路〈但し縄内拾貳町、尼將軍御所御敷地と号す〉」を知行していると主張しているのだから（『大通寺文書』享禄4年（1531）8月17日室町幕府奉行人奉書（折紙））、やはり六宮8町＋御堂敷地2町＋薬師堂跡1町

＋西御所跡1町というのが、遍照心院の基本的な主張なのだろう。

そうなると遍照心院領は八条1坊の12町に九条1坊9町の款冬田7段を加えたものとなる。いくら西八条というすでに京都の郊外になっている土地だといっても、あまりにも広大な点が不審といえば不審である。平家西八条亭の周辺にも、平家関係者および郎従らの宅地が広汎に展開しており、それらも一括没官され、頼朝に給与され、それが実朝さらに本覚尼に伝領されていったのであろうか。

この六宮と関係あると考えられるものとして、『拾芥抄』中末諸名所部に見える「六ノ宮〈八条北、朱雀西〉」がある。また同京程部の版本に挿入された東京図には「六宮」は平家の西八条亭の西、八条北、朱雀東に描かれている。前者の朱雀西は朱雀東の誤記な

いし誤写であろうし、後者のそれは西御所跡（八条1坊4町）の位置にあたる。『拾芥抄』は鎌倉中期に原本が成立したとみなされているが、平安京指図のうち、来歴のわかるもので最も年代の古い九条家本『延喜式』平安京左京図（建保6〈1218〉年以降成立）の当該個所には何の記載もない。六宮の成立が鎌倉前期から中期にかかるころだった可能性を語るものかもしれない。

III. 六孫王神社はいつ成立したか

この地に平安の昔から六孫王を祀る施設があったと考える人々は、「六宮」に六孫王源経基を結びつけようとする。Aの左半分に書かれた系図の経基の傍注にも、「源氏姓を賜はる／地主を六宮権現と号す／源家代々の御敷地」とあり、経基＝六宮＝地主神と説明している。その六宮が『大通寺文書』に登場するのは、文永9年（1272）8月日本覚尼置文（『鎌倉遺文』11093号）が最も古い。

そこには「一、六の宮八町事」として「御領八町うちハ、むかしよりいまにいたるまで、子細他所ニことなり、たとい重過の物なりといへとも、このうちニ入ぬれハ、他人らうせきをいたす事なし。末代ニいたるとも、寺門このよしを存知すへし」とあり、アジュールの明確な初見史料として知られる¹⁴⁾。細川涼一氏は寺社の不入権一般ではなく、アジュールの先駆がこの地に見られるのは、遍照心院の律僧が私的・当事者的な利害関係を超越していたからだ、と考えている¹⁵⁾。

興味深い指摘だが、いまは関心を六宮が六孫王と結びつくかどうかにかぎる。そこで疑問。もし本当にこの地で六孫王が平安中期以来ずっと崇敬の対象だったなら、平家の時代に

はどうなっていたのか。平家の全盛期に西八条殿の一角、もしくはその最近接地に、源氏の聖蹟が存続していたなどということが、ありえるだろうか。これは素朴だがかなり核心をついた疑問で、諸氏は当時平家に占拠されていたとか、逼塞していたとか、この地を領していた源三位頼政が平家に譲った、などと説明する。だが具体的な根拠は何も示されておらず、苦し紛れ、または憶測の域を出ない。

経基を六孫王というのは、『尊卑分脈』第三篇清和源氏での経基王の傍注では、「第六親王（清和天皇の第六皇子貞純親王）の子たるによりてなり」と説明している。『都名所図会』挿画中の貞純社は、父とされる貞純を祀る社である。他の諸系図も清和一貞純一経基という系譜で書かれているが、貞純一経基という系譜には疑問や矛盾も多い¹⁶⁾。

そもそも孫王とは天皇の孫の王であるが、王とは親王になれず、また姓を賜って臣籍にも降らなかった男子をいう。これにたいし「六宮」は何を意味しているのだろうか。宮は皇后・皇子・皇女などの住む所や御所、または皇后・皇子・皇女などの敬称である。この場合の六宮が、人物の呼称としての第六の宮の意味なら、貞純親王は六宮というのも可能である。しかし、経基王が孫王なら宮といわれるはずがない。そして経基王が臣籍に降って源姓を名乗った以後は王ですらない。語の意味として「六宮」と六孫王の間には、明らかな距離がある。

武家の源氏が清和天皇の子孫ではなく、その子陽成天皇の末裔であると述べる河内守頼信告文案などにいたっては、経基を元平親王の子としている（『平安遺文』640号）。同文書の真偽の評価は難しいが、元平親王が第六の宮であったという徴証はない。

じつは承平・天慶の乱があった平安中期以降長い間、源経基は確実な史料には、全くといってよいほど登場しない。『鎌倉遺文』全巻を検索しても、六孫王や経基について記す文書は一点もないのである。『平安遺文』にも問題の河内守頼信告文案に経基の名が見えるだけで、六孫王は見あたらない。わずかに『吾妻鏡』に、源行家のことを、甥の義経が「彼は他家に非ず、同じく六孫王の余苗として弓馬を掌る」と述べる個所があるが（文治元年（1185）10月6日条）、地の文の一節だから、『吾妻鏡』が編纂された鎌倉後期以降の知識で、書いているとせねばならないだろう。管見の限りでは、六孫王の呼称が文献に登場する早い例は『承久記』の最古態を示す滋光寺本で、同本は仁治元年（1240）ごろまでに原型が成立して、その後若干手が加えられているとされる¹⁷⁾。経基を六孫王と呼ぶようになるのは鎌倉中期を遡らないものと思われる。

そして、六孫王の称が『大通寺文書』に登場する初見は、建武4年（1337）11月18日の足利直義禁制（下知状）である。直義の禁制といっても、「右当寺は、清和六孫王の旧き名跡、鎌倉右丞相の菩提所なり。彼の正室三位家建立の仁祠にして、禅定尼二位家帰依の練若なり。爰に天道の授くる所、我家忽ちに開運、この時に相ひ当り、豈に崇重せざらんや。而るに無慚無界の輩、寺辺寺領の間、或いは仏陀の冥鑿を憚らず殺生を行ひ、或いは僧衆の制止に拘はらず濫吹を致すと云々」とあるように、あくまで当寺すなわち遍照心院側の主張する由緒と無慚無界の輩の行為を禁止すべき訴えを、直義がそのまま受け止めて発給したものである。

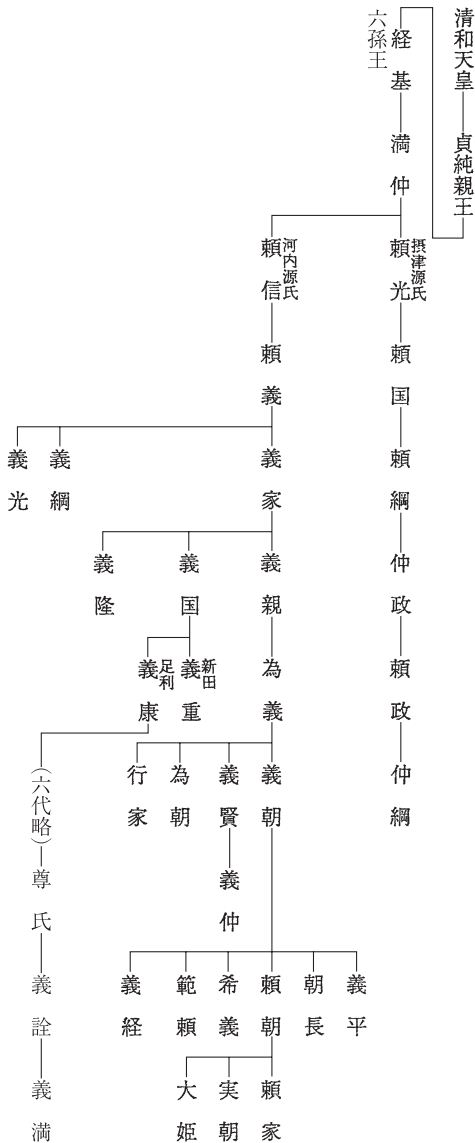
源氏にとって、京中第一の聖蹟は、頼朝に

よって建てられた六条若宮八幡宮であり¹⁸⁾、近年紹介された田中穰氏旧蔵の典籍古文書中に含まれていた「六条八幡宮造宮注文」などによっても、その重要性が知られる。同宮は室町幕府にとっても重要な意味をもった。これは源為義の「六条堀川」宅に由来するようだが、義家まで遡る可能性がある。また頼朝が奥州藤原氏の討滅にあたり頼義故実を忠実になぞることで、全国の御家人は源家累代の家人であるという神話を樹立した政治手法は、川合康氏によってあざやかに論証された¹⁹⁾。

これにたいし頼義以前の先祖に、頼朝が特別の関心をもった形跡は見あたらない。まして源氏将軍が断絶して以後になれば、経基が敬慕の対象になる必然性は、全くといってよいほどない。さらにその父貞純親王におきてをやである。

以上の諸点から、「六宮」が経基ないしその父宮を指しているとは考えにくい。さらにいえば平安の昔から六孫王が当地で祀られていたという所伝も信を置きがたいのである。しかし足利氏が室町幕府を開くようになると、事情は変わる。同じ源氏の傍流である彼らは、頼朝とその直近の父祖の権威を相対化せねばならず、他方源氏の嫡流の系譜から足利氏が枝分かれした義家以前の祖先に、自らの正統性の証しを求めた必要があった。その場合、頼朝が大いに政治利用した頼義は避けたい、その父頼信は頼義に近すぎる。思い切ってこれも飛ばして頼義の祖父満仲とその子頼光まで遡れば、政治的に無垢で我が遠祖として強調するのに問題がない（第4図）。

こうして室町幕府においては、満仲・頼光が崇敬の対象となり、彼らを祀る摂津多田院（兵庫県川西市）に手厚い保護が加えられた。



第4図 清和源氏略系図

南北朝内乱期には尊氏・義詮の遺骨が多田院に分骨され、多田院は足利氏の始祖たる満仲と室町幕府の始祖尊氏・義詮が一体になった廟所となり、歴代将軍の篤い信仰の対象となってゆく²⁰⁾。頼光を鬼退治の将軍とする酒吞童子説話が脚光をあびるようになるのは、まさにこの時期なのである²¹⁾。そこまでくれ

ば、源氏の第一歩を印した満仲の父経基に、光があたるようになるのは時間の問題であっただろう。

遍照心院は足利氏の時代を迎え、幕府の庇護をかちとるためには、実朝の菩提所、北条政子帰依の寺というだけでは弱いと考えたに違いない。そこで、すでにある「六宮」に足利氏が受け止めやすい「六孫王」を結びつけ、自らを「清和六孫王の旧き名跡、鎌倉右丞相（実朝）の菩提所」と位置づける作為を案出したのであろう。かくて古き由緒と称して新たな歴史が創造された。Aの系図で経基のことを事実を無視して経基親王と記しているのは、遍照心院側も孫王は宮とは呼ばれない事実、気がついていたので違いない。

『尊卑分脈』の経基王の傍注に「この王西八条が池に於て、竜として住ましむと云々」とあるのは、当時それを真実めかすために流布していた情報が無批判に採用された結果であろうし、後世の『都名所図会』挿画に見える神竜池は、その物証の意味を付与されたわけである。また同じ挿画の弁天堂の文字表記には「弁天社／たんじょう水」と書かれ、本文に「源満仲公誕生の時、この水を汲みて産湯とす。洛陽の名水、七井のその一つなり」と解説されている。もともと人口に膾炙した井戸が、近世の後期までの間に満仲と結びつけられて整備されていったものだろう。

応永5年(1398)12月の年紀をもつ足利義満の寺領安堵の御判御教書は、IIで述べた通り彼の武家様花押の使用年代の下限からいって、文書自体は信頼性に欠けるものである。が、たとえば同年7月の「炎上」によって失われた同文書を大通寺が複製し、年号のみ「炎上」後にずらした、などといったことならありえなくはない。そしてそのような義

満による寺領の安堵が、応永5年以前のある時点で実際にあったとすれば、「六宮」を六孫王に結びつけるための懸命の努力が効果をあらわした成果だと考えられる。

最後に六宮が六孫王でなく邸第名などでもないとするならば、いったい誰を指しているのだろうか。史上六宮と呼ばれる有名人物には、花山法皇寵愛の皇子清仁親王や鳥羽天皇の第六皇子道恵法親王などがいるが、この地との関係はわからない。六宮というだけなら過去に該当者はいくらでもいるであろう。

ところで、坊門信清の娘で源実朝室となった本覚の姉に坊門局がいる。後鳥羽天皇后宮で冷泉宮頼仁親王・道助入道親王を生み、承久の乱後、後鳥羽にしたがって隠岐に赴いた(『愚管抄』巻6)。道助は建久7年(1196)生まれ、宝治3年(1249)に没している。正治元年(1199)親王宣下を受け、建永元年(1206)仁和寺の道法法親王を師として出家・受戒、建暦2年(1212)に伝法灌頂を受けた。道法法親王の没後、建保二年(1214)に仁和寺寺務に補せられた。父後鳥羽上皇が出家する際にはその戒師を務め、晩年は高野山に籠居した(『仁和寺御伝』光台院御室など)。

本稿Ⅱで紹介したように、寛喜3年(1231)正月22日、西八条で故実朝の十三年忌追善供養が行われ、もと実朝の寝殿の堂供養が行われた。『明月記』によれば、これに多数の公卿が堂供養に参列したことがわかる。そして本覚尼の従弟、源師季が奉行となり行事をはじめた。本覚尼の姪嘉陽門院(礼子内親王)と甥にあたる御室光台院の道助は前日より堂を御所として泊まり込み、道助は当日は曼荼羅供の大阿闍梨を務めた(『民経記』)。

彼は後鳥羽の第二皇子であるが、『本朝皇胤招運録』などでは第五の皇子、そして『諸

門跡譜』仁和寺殿などでは、後鳥羽院第六皇子と記されており、そういう所伝もあつたらしい。六宮と呼ばれた可能性が絶無ではなく、本覚尼の甥という身内であるから、当地にかかわりをもつに相応しい人物といえる。

論証にも何もなっていないが、道助の別称かもしれない六宮の名を冠することによって、遍照心院をとりまく八条1坊2・7・10・11・12・13・14・15の各町を、安定的に維持せんとしたと考えるのは無理だろうか。序でながら本覚尼の姉で道助の母であった坊門局は、「西御方」とも呼ばれた女性である(慈光寺本『承久記』、『平戸記』寛元3年10月24日条)。西御所跡1町は、後鳥羽の死後帰洛した彼女の晩年の住処だったのでは、と思うのだが……。

〔付記〕本稿は第24回立命館地理学会大会(2012年12月1日於：立命館大学以学館1号ホール)で「あの史跡に学問の光をあてると……」と題して講演した内容を論文化したものである。

注

- 1) 中村武生『京都の江戸時代をあるく』、文理閣、2008。
- 2) 『京都市の地名(日本歴史地名大系27)』、平凡社、1979、1078頁。
- 3) 池田敬子「祇王」、(大津雄一他三名編『平家物語大事典』、東京書籍、2010、所収)。
- 4) 角田文衛「建礼門院の後半生」、(『王朝の明暗—平安時代史研究・第二冊』、東京堂出版、1977、所収)。
- 5) 藤岡通夫『京都御所〔新訂〕』、中央公論美術出版、1987。
- 6) 寺升初代「平安宮の復元」、(『平安京提要』、角川書店、1994、所収)、155頁。
- 7) 宮上茂隆「金閣寺」、(『金閣寺・銀閣寺(日本名建築写真選集11)』、新潮社、1992、所収)。
- 8) 百瀬正恒「東山殿(慈照寺)の建物配置と庭園」、日本史研究399、1995。
- 9) 上島有『中世花押の謎を解く 足利將軍家とその花押』、山川出版、2004、192-209頁。

- 10) 高橋昌明「平家の館について」、(『平家と六波羅幕府』、東京大学出版会、2013、所収)。
- 11) この問題の経過については、高橋昌明「梅小路公園は平家の西八条邸跡」、『ねっとわーく京都』255、2010、28-36頁。『京都に海の水族館？(かもがわブックレット180)』、かもがわ出版、2011などを参照。
- 12) 細川涼一「源実朝室本覚尼と遍照心院」、(『中世寺院の風景』、新曜社、1997、所収)。
- 13) 款冬町をめぐる遍照心院と東寺の争いについては、仲村 研「東寺境内款冬町の支配」、秋山國三・仲村 研著『京都「町」の研究』、法政大学出版社、1975参照。
- 14) 平泉 澄『中世に於ける社寺と社会との関係』、至文堂、1926、118-120頁。
- 15) 細川涼一注12)論文。
- 16) 元木泰雄『源満仲・頼光(ミネルヴァ日本評伝選)』、ミネルヴァ書房、2004、8-9頁。
- 17) 『新古典文学大系43 保元物語・平治物語・承久記』の「承久記 解説」(久保田淳)、岩波書店、1992。
- 18) 魚澄惣五郎「六条左女牛八幡宮について」、歴史と地理8-6、1917、同「八幡宮と足利氏」『古社寺の研究』、星野書店、1931。
- 19) 川合 康「奥州合戦ノート」、(『鎌倉幕府成立史の研究』、校倉書房、2004、所収)。
- 20) 元木泰雄注16)著書、195-196頁。
- 21) 高橋昌明『酒吞童子の誕生—もう一つの日本文化—』、中公文庫、2005。